

序章 阿蘇が世界農業遺産に

①現地調査……草原の野焼きを中心に→×

理由：どこでもある。具体的な農業の営み、農業に与える影響が見えない。

改善案：この地域の独自性のある農業に結びついているという、具体的な実証。

- ・草原で肉牛（あか牛）を生産する伝統的な放牧の方法
 - ・草原から採取した草を対比に用いる野菜づくり など
- これらの集まりをひとつの農業システムとして訴える。

②FAO（国際連合食糧農業機関）本部へ……阿蘇地域の農業システムがいかに世界的な意義をもつか。
→○

③FAO 国際会議……○→認定へ

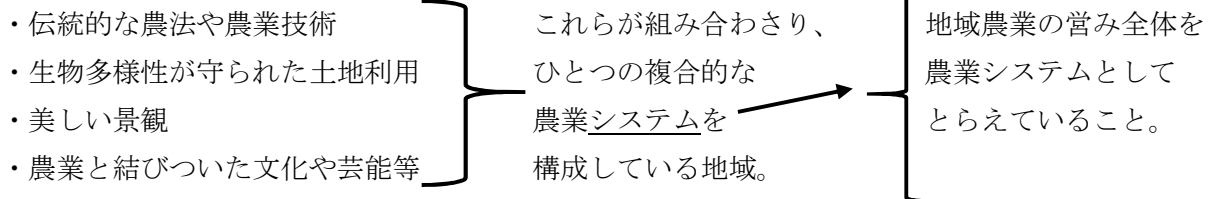
蒲島知事「私は、知事として、阿蘇の100年後を見すえて、持続的農業、草原の維持・管理、景観と生物多様性の保全、市民の参加という4つの施策を進めていきます。」

- ・認定されるか否かは、アピールの「目の付けどころ」。
- ・独自性が重要。特に農業システムか。
- ・しかしこの章だけでは、阿蘇独自の農業システムはよく見えず。→第2章にあるだろう。

第1章

世界農業遺産の誕生

世界農業遺産の英語での正式名称は、Globally Important Agricultural Heritage Systems。
通称「GIAHS」（ジアス）。



ユネスコの世界遺産とは何が違うのか

世界遺産 手つかずのもの、古いものを重視。

世界農業遺産 代々ひきつがれてきた知恵の遺産を重視。大切なのは、維持・管理する人たちと一体になったシステム。PAST（過去）ではなく、FUTURE（未来）。

どのような地域が、世界農業遺産に認定されるか

①食糧生産と生計の関係……第1ポイント

→○生きた農業生産システム ×過去の遺物

②生物多様性および生体系機能

→生物多様性と調和したしくみになっているか、自然の恵みをいかしたしくみになっているか。

③知識システムおよび適応技術

→その土地で生きている人々の知恵や慣習を大事に。 ×科学的知識一辺倒

④文化、価値体系および社会的組織

→○農業は総合的な文化。行事・祭り・農作業上の約束事・鎮守の森・信仰対象 ×農産物の生産

⑤勝れた景観、土地および水資源の管理の特徴

→水や土地をうまく利用できているか、土壌侵食、水資源の枯渇をもたらしていないか。

上の①～⑤の観点で、「イフガオの棚田」と「中国の水田養魚」の2つのサイトを見てみた。

サイト名	食料生産と生計の関係	生物多様性生態系機能	知識システム 適応技術	文化、価値体系 社会的組織	景観、土地・水資源の管理
イフガオの棚田	どの農家も3種類以上の品種の稲を植えている →高地に合うような品種改良、リスク回避	・藁ぶき屋根の住居 ・発酵した稲わらは堆肥として野菜づくりに ・水田に生息する小魚や貝、小動物は食料 ・周辺の焼畑でサツマイモ栽培	・周辺の林は住居の材料や燃料に	・2000年以上続いている ・周辺の林から果物や薬、儀礼用の植物が採れる	・美しい棚田 ・山が蓄えた水を利用した巧みな灌漑システム
中国の水田養魚の維持と発展	過去、田魚は村人のみで食べていたが、現在はブランド化され3倍の値段に。米のブランド化。	・魚が雑草や害虫を食べる ・排泄物が稲の肥料に ・魚は食用 無農薬・肥料・食用と一石三鳥。	・田魚は富をもたらす象徴 →嫁入りの際に持参することも。	700年続く	池などに、水質のよい水を貯めている。この水で養魚。

→日本の GIAHS の教材化にあたり、そのサイトの特徴を分析する際に使えるのでは。

世界農業遺産の精神

○「～した方がよい」・・・GIAHS の精神→持続的な生計

×「～してはならない」・・・ユネスコの世界遺産はこちら

誰のための世界農業遺産か

・観光で得た利益が誰のもとへ行くか。「ハニ族の棚田」の観光ポイント、見晴台の土産物屋は、観光業者が経営。利益は農家にも還元しているが、還元分は少ない。

・千枚田をはじめ、農業遺産を訪ねるツアーがあるが、地元農家の利益と直接つながっているものばかりではない。現地にお金が落ちず、作業の障害になっている事態も考えられる。

→地域が栄えることで、観光も盛んに。

→それぞれが地域をつくっていく主体のひとりとして関わられるような、新しいしくみづくりが必要ではないか。

- 1、 5つのクライテリアを参考に、世界農業遺産に認定された地域を正しく把握する。
世界遺産のように日本語で書かれた登録申請書はあるのか

2. 阿蘇の野菜のよさは（他地域との違い）
草地・赤牛・畑をつなぐシステムであればESD的に評価できる。

3. ブランド化にも取り組んでいる 小規模農業の生き残り作戦
大規模可では対抗できない。

4. 伝統的な農法の伝承